
東方氷闘録 序章一始まり

運命の人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方氷闘録 序章―始まり

【Nコード】

N0457Q

【作者名】

運命の人形

【あらすじ】

とある日…紅魔館に集められた幻想郷の住人達…その皆の前に現れた紅魔館の主であるレミリアは大会の開戦を宣言した…さまざまな敵が襲い来る中…チルノは昔の約束を守るため、強く、そして大きく成長していくのである…

このお話は…そんな物語の始まり…

始まり（前書き）

初めまして。運命の人形という者です。このサイトに載せるのは初めてなので、いろいろご迷惑をお掛けするかも知れませんがよろしくお願いします。

このお話はチルノ視点で展開していきます。また、このお話のチルノはクールキャラなので、その辺をご理解のうえ、閲覧願います。

始まり

チルノ「ふう、なんとか勝てた…。」

リグル「イタタタ…。チルノ、少しは手加減してよ、友達なんだしさ。」

チルノ「十分してるよ。その証拠にさっきのバトルの時、氷剣をずっと裏返して戦ってたんだから…。」

リグル「うー、ごめん。」

チルノ「気にしてないよ。ほら、立って。」

リグルの手を掴んで立たせると、大ちゃんとミスティアが近づいてきた。

大ちゃん「凄い凄い！！連戦連勝だよ！チルノちゃん！」

ミスティア「私もコテンパンにされちゃったからなあ…。ほんと、

チルノは強いよね…。」

チルノ「そんな事無いよ。これも、霊夢や魔理沙とたくさん戦ったからだし。」

氷剣を地面に突き立て、大ちゃんからタオルを受け取りつつ、ミスティアの方を向いてそう告げる。

リグル「ハハハ、それだけでも凄い気がするんだけど…。」

ミスティア「そうだよな。だって、あの二人と戦うのって、凄い怖いし…。」

チルノ「そんな事ないよ。あの二人、優しいし、この前だって、戦い方の指導をしてくれたよ。」

ミスティアとリグルが意外そうな顔をしているが、そんなにあの二人は怖そうに見えるのだろうか…。

チルノ「あ、大ちゃん、タオルありがとう。」

大ちゃん「あ、はい。それにしても、大丈夫？20戦全部チルノちゃんが戦ってるよ？そろそろ、つらくない？」

心配そうに見つめてくる大ちゃんの頭を優しくなでながら

チルノ「大丈夫だよ。私としては、大ちゃんの怪我するところ、見たくないから。だから、任せて。」

大ちゃん「えうう、う、うん。」

大ちゃんが顔を真つ赤にしてうつむいてしまったが、私、何か変な事を言っただけかな？

チルノ「そういえば、リグルたちは今どれ位勝ってるの？」

リグル「9勝11敗…総ポイント数も21…はあ、これじゃあもう優勝なんて出来ないよあ…。」

チルノ「泣かないで。今回は駄目かもしれないけど、もしかしたら、吸血鬼たちがまたこんな大会を開くかもしれないでしょ。」

リグル「うう、ありがとう。」

ミステリア「じゃ、私たちはそろそろいいこっか。一旦回復しないと体がもたないしね。」

リグル「うん。そうだね。じゃ、チルノ、大ちゃん、頑張つてねー！」

リグルは大きく手を振り、ミステリアはペコリとお辞儀をして森の中にいつてしまった。

大ちゃん「いっちゃったね。チルノちゃん、今日はもう二回戦つちやっただし、休憩に行こう。」

チルノ「そうだね。それに、今日はちょっと疲れたし。大ちゃんは大丈夫？」

大ちゃん「私は大丈夫だよ。チルノちゃんが頑張ってくれてるおかげであんまり疲れてないよ。」

チルノ「それなら良かった。それにしても、なんであの吸血鬼たちは、こんな事やりだしたんだろうね？はあ…。」

大ちゃん「ふふ、またそのこといつてる。深く考えたってわかんないよ。あの人たちのことだから、きつとまた『暇だから』とか言い出すもん。」

チルノ「そうだね、確かに、そう言っただけさ。」

そう、今しがた私たちが行っていたバトルは、吸血鬼、レミリア・

スカーレットが言い出したものなのだ。それも、十日ほど前に突然…

――十日前――

チルノ「幻想郷の住人を全員集めて、何をする気なんだろう？」

突然、紅魔館への招待状がこの日、幻想郷全域に届けられた。それは、私や大ちゃんにもしつかりと届き、今、私はいつもの友達たちと、紅魔館の広間の中で話しているところだ。

大ちゃん「また、新しいパーティーをするつもりだったり。」

リグル「ははは、金持ちつて、よくわかんないところで、金を使いたがるよね…。まあ、こうやっておいしい野菜を食べさせてもらえるからいいけど…。はぐはぐ。」

ミステア「うん。ここのメイドさん、えっと、咲夜さんだっけ？あの人、こういう所にも、気を配ってくれるから、優しいよね。」

ミステアとリグルが並んで野菜を食べている。

ルミア「そーなのかー。でも、私は肉料理の方が好きだなあ。」

スター「ふふ、まあ、それは誰が見ても分かることよね。そんな、皿の上に肉肉肉と盛っているんだもの。」

ルミア「そーなのかー。」

サニー「ごくごくごく、ぷはあ！やっぱり牛乳はおいしい！ルナもそう思うでしょー!!」

ルナ「サニー、胸のこと気にしたって、私たちは成長しないって、何度言ったら分かるの…。」

サニー「べ、別にそんなんじゃないもん！べ、別に、胸を大きくしたいから飲んでるわけじゃないもん!!」

ルナ「はいはい…。」

この館の中では、ルミアもいつもの闇を作り出す必要は無いみたいで、私たちと気軽にしゃべりが出来る。どうやって光を操る三月精と仲良くなったのかは分からないけど、それほど気にする事でもないし、いいかな。

レティ「ほらほら、皆静かにして。やっと出てきたから。」
広間の中心に、レミリア、咲夜、パチュリーが立っている。

レミリア「ええー、あんたたち、静かにしなさい！これから、重大な発表をするわー！」

いつものように偉そうに語りだす。

レミリア「これから、この広間に集ってもらった全員には、タッグを組んで戦ってもらわー！！」

チルノ「は？」

レミリアの発言に思わず口がふさがらなくなってしまう。広間に集まっていた連中も、ざわざわと困惑しているようだ。いや、面白そうな顔をしている…。ほんと、暇な連中しかないのね…。

レミリア「静かに！！これから、咲夜に説明してもらわー！」

咲夜「それでは、簡単に説明をさせていただきます。皆様には、私たちが予め決めておいた方と契約し、チームを組んでいただきます。しかし、ただ入り乱れて戦っては意味がありません。よって、大会形式とし、このルールに従って戦っていただく事になります。」

咲夜の後ろに巨大な紙が現れて、そこに文字が記される。どうやらパチュリーが魔法で記しているようだ。

一、バトルは交代制で、まず、タッグのうちどちらかが先にバトルをし、負けた方はもう一人と入れ替わる。相手チームを両方倒したチームの勝ちとなる。

二、一日の間にバトルは二回しか行えず、それ以上行う場合、即失格とする。

三、休憩中の相手にバトルを挑んではいけないも。これを犯した場合も即失格とする。

四、大会中、同じチームへの再戦を挑むことは出来ない。ただし、決めた全てのチームと戦わなくてはならない。

咲夜「以上が、この大会の最低限のルールです。因みに、この大会はポイント形式となっており、相手チームの一人でも倒す事が出来れば1ポイントとなります。ポイントに関しては、こちらで厳重な

チェックを行うので、不正等の心配はございません。なお、大会中は幻想卿内のどこにいても構いませんが、絶対に、大会開始から30日以内に全てのバトルを終わらせ、ここまですり戻りください。」

レミリア「ふふふ、そしてお待ちかねの優勝商品だけど……」

レミリアが、咲夜のマイクを無理やり取って話し出す。

レミリア「願い事を一つかなえてあげるわ！！どんな願いでもね！！！」

広間内の大半が、その言葉で更にやる気を出したみたいだ。私としてはくだらない……。帰ろうかな……。

レミリア「おっと、帰ろうとしても無駄よ！！あんなたちの食べていた物には、全部、このパチエの魔法が掛かっていて、この大会が終わるまで、逃げられないわ！！因みに、私たちもしっかりたべたわ！」

はあ……。強制参加なのね……。

咲夜「それでは、これよりチームの発表をしていきたいと思います。」

レミリアの手から咲夜にマイクがわたる。

咲夜「まず初めに、リグル・ナイトバグ&ミスティア・ローレライ！」

いきなりこのことで二人とも困っているようだが、レミリアたちの前までいって、契約をする。契約といっても、ただ、チームになる事を言い、その後にパチュリーからネックレスを下げてもらうだけだが……。何か意味があるのだろうか？

咲夜「次、……………」

次々にチームが決まっていく。チーム編成を見るに、どうやら、関係の深そうな人たちを合わせたようだ……。という事は、私はいつもいる友達の誰かと組む事になるのか……

咲夜「……………&レティ・ホワイトロック！」

いけない、レティのパートナーを聞き逃した。えっと、え！？リリィホワイト！？いたの！？

リリーホワイト「こーんにーちはー。」

レティ「あなたと組むことになるなんて…。よろしくね。」

リリーホワイト「一緒に、頑張りましょー！」

オー！と手を掲げるリリーホワイト…。どうやら、幻とかというオチではないらしい。つまり、今の幻想卿はどの季節にも属していないのかもしれない。周りを見渡して見れば、秋姉妹や幽香もいる…。

咲夜「…チルノ&大妖精！」

私は、大ちゃんと組むのか…。

パチュリーの前までいつて契約をしようとするが、大ちゃんががちに固まっている。そんなに恥ずかしい事だろうか？

チルノ「今から、私、チルノは大妖精とチームを組む事を、ここに誓います。」

大ちゃん「い、い、今から、わ、わわ私、だ、大妖精は、ち、ちちち、チルノ、ちゃんと、ち、チームを、組むことを、こ、ここに誓います！…！」

いつにもなくかみかみの大ちゃんだけど、よっぽど皆の前に出るのが恥ずかしかったのかな？

咲夜「次、博霊 霊夢&霧雨 魔理沙！」

あの二人が組むという事に、皆驚きを隠せていない…。はつきり言つて、私も驚いている位だ。

咲夜「最後に、レミリア・スカーレット様&フランドール・スカーレット様！」

予想はしていたけど、まさか、本当にあの妹が出てくるなんて…。どうやら、ここで契約をするつもりはないみたいだけど、油断できないチームなのは確かだね。

咲夜「以上です。皆様、本日はお集まりいただき、誠にありがとうございます。つきましては皆様に、お部屋をご用意いたしましたので、本日はこちらでお休みください。」

レミリア「私の寛大な心に感謝なさい…！」

こうして、訳の分からない大会に参加させられる事となってしまう

たの
だつ
た
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0457q/>

東方氷闘録 序章－始まり

2011年1月13日00時01分発行